

■飯塚琅カン齋 竹工芸家。格調ある伝統的な正調を保持しながら、日常生活用具の竹細工を、芸術品の域に引き上げた。

いづかろかんさい(カンハ王偏に干)

帝国議会始・1890＝ 栃木県下都賀郡栃木町で、\_代々竹芸を業とする籠師飯塚鳳齋(初代、後に鳳翁)の六男に生まれる。本名彌之助。母ヒデ、兄たちも竹工の道に進み、18年上の長兄は二代鳳齋、三兄は蒼雲齋を名乗る。

日清戦争始・1894＝ 4歳：

白馬会・・・1896＝ 6歳：栃木町立高等小学校に入学。

Bushidou・・・1899＝ 9歳：

教科書疑獄・1902＝12歳：この頃より、漢学を佐山立圃に、\_父鳳齋に竹工を学び始めると、

日比谷公園・1903＝13歳：改称した栃木第一尋常小学校を卒業。

日露戦争始・1904＝14歳：この頃には竹割りができるようになるなり、

日露戦争終・1905＝15歳：

アヲキ創刊・1908＝18歳：\_傑出した才能を示して、18上の長兄(二代鳳齋)の代作をつとめるようになる。

韓国併合・・・1910＝20歳：この頃、父とともに上京し、本郷区湯島に居を定め、\_竹工の基礎となる唐物の写しに習熟するうち、

大逆事件判決1911＝21歳：この頃から、職人技の籠師ではなく、\_芸術としての竹工家を志すようになり、茶道や華道も習い始める。

明治天皇没・1912＝22歳：

第一次大戦始1914＝24歳：この頃、妻を得る。二代鳳齋が東京大正博覧会に竹製笈他3点を出品、銀牌を得る。

21ヶ条要求・1915＝25歳：宮内省より飯塚家に依頼された、\_大正天皇即位に伴う大嘗祭のための、\_糟服、\_麓服一対を納める「神服入目籠」を、\_父鳳翁、\_長兄二代鳳齋とともに制作。

民本主義・・・1916＝26歳：\_父であり師だった鳳翁が死去、琅カン齋、別号友石を名乗り始める。

ロシア革命・1917＝27歳：

この間、二代鳳齋が第6回農商務省工芸展(以下、工芸展)、第7回工芸展に出品。商工展に変わった後も続け、日本美術協会、各博覧会に、また帝展に工芸部設置後は帝展を主とし、二代鳳齋も出品し、それぞれ受賞すること多し。\_工芸界において低かった竹工の地位を引き上げるべく、花籠を主に、真・行・草に分けて作り、公募展には、正倉院の御物に見られる「束ね編み」を復活させるなど、緻密な編み込みで古典的風格を造り、「真」の作品を出品して認めさせていくが、創造性はむしろ、個展や個人の注文のために制作した「行」「草」の作品で発揮され、粗く自由なものながら品格を落とさず、「編む」というより「組む」という概念まで加え、近代工芸としての竹工を完成させて行く。また、ほとんどの作品に銘を付け、「真」では万歳や富貴など豊かさを、「行」「草」では鳴戸や阿ら磯など自然の情景を表現、「用」を超えた表現の世界を獲得して行く。

原敬首相暗殺1921＝31歳：

水平社結成・1922＝32歳：\_平和記念東京博覧会に出品した「厨子花籠」が銀賞、\_宮内省買上げとなり、日本美術協会審査員に就任。

関東大震災・1923＝33歳：関東大震災に遭い、栃木町に一時疎開し、帰京後、上尾久町に仮居住する。

治安維持法・1925＝35歳：

住居を上尾久町から下谷区上根岸に移す。工芸展は商工省工芸展となり(以下、商工展)、出品した「竹手筥」が三等賞。\_パリ万国現代装飾美術工業博覧会に出品した「手筥」が銅賞。

円本時代始・1926＝36歳：

第1回聖徳太子奉賛展が開催され、工芸部門に出品。第13回商工展に「茶藍」「花藍・四海波」を出品し三等賞。木竹工芸発展を目的に結成された木竹工芸会に、二代鳳齋とともに同人となる。\_帝国美術展覧会(以下、帝展)への工芸美術部門設置運動で工芸家が参集した日本工芸美術会の結成に竹工界からただ一人参加するなど、竹工界の旗手になる。日本工芸美術会第1回展に「花藍・富貴」(京都国立近代美術館蔵)を出品。

金融恐慌・・・1927＝37歳：

東京の日本橋三越で、初の個展開催、以後、たびたび同所で個展。

共産党事件・1928＝38歳：

青山女子学修院の依頼により、\_昭和天皇の御大礼式典に、\_皇太后陛下に「掛花籠」謹製、

世界恐慌・・・1929＝39歳：

帝展への竹工界からの初入選は大阪の坂口宗雲齋に譲るものの、

海軍軍縮条約1930＝40歳：

この年、東京府商工奨励会(工芸展覧会)の審査員となる(戦時解散まで)。

満州事変・・・1931＝41歳：

\_第12回帝展に「竹手筥」出品し初入選すると、

五一五事件・1932＝42歳：

一芸一匠の工芸研究および制作発表のための展覧会を開催する目的で(緑明荘)が結成され、同人として参加

。\_第13回帝展に出品した「竹手筥」が特選になり、\_宮内省買上げ。

国際連盟脱退1933＝43歳：

\_第14回帝展に「盛藍」を無鑑査出品。東京府の依頼により、\_シカゴ万国博覧会に「花籠」出品。国立仙台工芸

指導所の紹介で、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトが来宅、その作品に感動する。

帝人疑獄事件1934＝44歳：

長兄の二代鳳齋死去。\_第15回帝展の「竹風爐先屏風」も特選になる。

芥川直木賞始1935＝45歳：

栃木県主催の郷土工芸講習会が宇都宮市の男子師範学校開かれ、四人の弟子を助手に講義と実技指導。

二二六事件・1936＝46歳：

日本橋高島屋で個展開催。工芸界で活躍する板谷波山、六角紫水、香取秀真らと皐月会を結成し、第1回展

に出品。国際文化振興会の依頼によりシドニー国際美術展に出品。\_前年の第16回帝展に続き、改組第1回帝

展、\_文部省美術展覧会(文展)の後期招待展と、「花籠」出品、以後文展につづける招待出品は殆ど花籠。

日中戦争始・1937＝47歳：

\_パリ万国博覧会にも「花籠」を出品し名誉賞。帝展を引き継いだ第1回文部省美術展覧会(以下、新文展)に、

以後、無鑑査招待、現在に続く芸術院会員となり、第1回新文展に「釣花籠」

第二次大戦始1939＝49歳：

ベルリンでの国際手工業博覧会に出品。\_第3回新文展では竹工界初の審査員に就任し、「盛藍」招待出品、

大政翼賛会・1940＝50歳：

新文展に代って紀元二千六百年奉祝美術展覧会が開催され、「竹花皿」を招待出品。

日米開戦・・・1941＝51歳：

\_第4回新文展に「竹炭斗」を招待出品、

・・・・・・1942＝52歳：

日本橋高島屋で、個展以外では初めての竹工だけの展覧会(現代名匠竹藝美術展)が開催され、長男の小カン

齋らとともに出品。日本竹芸会の結成に、他の主だった竹工作家とともに参加。上野松坂屋企画で東京工芸

界を代表する13人を選抜した「工芸燦匠会作品展」に、竹工界からただ一人選ばれて「花籠・萬歳」出品、

小カン齋を号していた長男幹夫が病死。上野松坂屋での第2回工芸燦匠会作品展に出品。同展はこの回で終

了。日本橋三越での第2回日本竹芸会展にも出品するが、同展もこの回を以って解散。日本橋高島屋で開催

された大政翼賛会、美術工芸作家協会主催の戦艦献納工芸品展示会に「花籠」を出品。

年金+総武装 1944＝54歳：

強制疎開のため、栃木市太平山の別荘に転居。戦時特別文展にも「花籠」出品、

敗戦・・・・・・1945＝55歳：

敗戦で日本美術協会が解散するまで、審査員を務めていた。

新憲法公布・1946＝56歳：

新文展に代わる文部省主催第1回日本美術展覧会(以後、日展)が開催され、「華藍」を委嘱出品、審査員扱い

になるも、第2回日展での無鑑査廃止制に、他の作家とともに出品拒否。折衷案として第3回日展は、

新憲法施行・1947＝57歳：

出品招待者制となり「花籠」招待出品。\_昭和天皇の栃木市巡幸に際し、\_同市献上の「花籠・魚の舞」を制作。

極東裁判判決・1948＝58歳：

第4回日展は文部省主催から日本芸術院主催となり、\_厳密になった招待で「花籠・林殿」を出品。

三大事件・・・1949＝59歳：

疎開先の太平山から東京都文京区千駄木町に転居し、第5回日展に「花籠」招待出品、

朝鮮戦争始・1950＝60歳：

第6回日展にも招待を受けたが、病気のため出品せず。\_二男の成年に、\_亡き長男の小カン齋名を名乗らせ、

結成された日本竹芸家協会の会長となるなど、戦後は、次代の竹工家に多大な影響を与え、竹工指導を通じ

て、故郷栃木県に今日盛んになっている竹工の種を撒いて行く。

独立回復・・・1951＝61歳：

第7回日展に「花籠・黄絨」を招待出品、

メーデー事件・1952＝62歳：

第8回日展に「花籠・萬々歳」を運営会参事として招待出品、

テレビ放送始・1953＝63歳：

第9回日展に、参事、審査員として、「花籠」を招待出品、

自衛隊発足・1954＝64歳：

第1回無形文化財日本伝統工芸展に出品。第10回日展に参事として「花籠・國光」を招待出品、

55年体制始・1955＝65歳：

第11回日展に、参事として「花籠・黄絨」を招待出品。社団法人日本工芸会が結成され、理事となり、第2回

日本伝統工芸展に出品、\_「花籠・あんこう」(東京国立近代美術館蔵)、

国連加盟・・・1956＝66歳：

第12回日展に参事として「花籠」を招待出品、第3回日本伝統工芸展に理事として出品する。

なべ底不況・1957＝67歳：

第13回日展に審査員として「花籠・魚籃」を待出品、第4回日本伝統工芸展には、理事として出品する。

インストラマン・1958＝68歳：

日展運営会が解散され、社団法人日展(新日展)の発足とともに同展を離れ、第5回日本伝統工芸展に理事と

して出品したのを最後に、\_急性心筋硬塞症のため、東京都文京区の自宅で、没した。

栃木県立美術館「創造の手わざ 近代工芸・栃木の七星」、